
追う彼女、逃げる彼

るーと3

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

追う彼女、逃げる彼

【Nコード】

N5258W

【作者名】

るーと3

【あらすじ】

「グエンさん好きっ!!」が口癖になっちゃってる侍女キーナと「黙れ寄るな。」それをバツサリ斬り捨てちゃう毒舌無慈悲な騎士様グエンダルの

ちよ、お前ら見てて何とも言えない気分になるんですけど。な恋愛？になればいい物語

始まりは

白銀の髪が灰煙に舞う
翡翠の瞳が敵を射抜く

光る鈍色
舞い散る赤
照らす太陽

振り向いたその眼光に

囚われた……

夢見る悪夢
縛られた感情
哀しい真実

戻れない過去に嘆き叫ぶことも出来ない

戻らない時間に怯え惑うことしか出来ない

気付かないで

どうか、どうか

その瞳に私を映さなくてもいいその心に私が残らなくてもいい

ただ追い掛けて

ただそれだけを考えて

だから、どうか、気付かないで

目を逸らした私に

嘘つきな私に

臆病で卑怯な私に

貴方を

殺そうとした私に

始まりは（後書き）

つ、ついに連載を書いてしまった！

あわわわわ；

頑張り…たい！…な。

彼女と彼（前書き）

短いです

彼女と彼

「グウーウウエーンすわぁーあんッ！！！」

澄み渡った青空の下響き渡った己の名に国家騎士団隊長であるグエ
ンダル・ハズウェルはその眉間に皺を寄せた。

女性では考えられない、スカートを持ち上げながら全速力で走って
くる少女。

「…キーナ。また転ぶ「ぎゃあああ！」…んだな。」

「グエンさんおはようございます大好きっ！」

華麗な顔面スライディングからガバツとグエンドルの足元より起き
上がった少女は、その大きな黒目を細め、満面の笑みを向けた。

「鼻の頭が剥けているぞ間抜け面め。」

そんな彼女を冷たく見下ろす翡翠の瞳

「え、乙女の告白をスルーですか!?!」

「乙女はスカートを持ち上げない。鼻の頭に擦り傷なども作らん。」

「グエンさんを想う気持ちを抑えられなくて、つい。愛の大きさをすよね!」

「愛の大きさと宣うなら今度からは身体中傷だらけの瀕死状態で来るんだな。」

「い、痛い! 愛が痛いよ、グエンさん!」

「愛が無いからな。」

「一刀両断!!!!」

ふと気付くと周りの護衛兵や侍女がクスクス笑っている。

グエンダルは眼光を一割増しに冷たくし常人ならば震え上がるであろう低い声を少女、キーナに向けた。

「で、何の用だ。」

「今度の休みには城下と一緒に行ってくれるって言ったじゃないで

すか。アレンさんから今日はグエンさんは休みと聞いたのです!」

グエンダルを這う声など効果は見当たらず。

どや顔でグエンダルを見やる。

チッ。

グエンダルは、ここには居ない戦友に舌打ちをした。

ついこの間、自分の後ろを着いてくる少女が鬱陶しくつい約束をしてしまったのだ。

本当ならばこんな約束どうだっていい。

どうだっていい。…はずだが

キラキラ

「……。」

キラキラキラ

「……………」

キラキラキラキラ

「……………」

「…人混みは避ける。」

「っ！はいッ！！」

尻尾があれば千切れんばかりに振っているであろう少女の約束を無下にするのは後味が悪すぎる。

どうせ他の騎士団の隊員の稽古を見るくらいの休日だ。
ならば1日位は城下に行ってもいいだろう。

「その間抜け顔で俺の半径5リード（5M）に近寄るんじゃないぞ。」

十
十
十
十
十

「はぁゝあ。無自覚っつーのは面倒くせえなあ、ったく。」

「彼女の休日をごエンダル様に合わせてよかったですわ。」

本来ならば鬱陶しければ完璧に無視または排除、その前に女の言葉になど耳を傾けることすらしない筈の戦友が

嫌々ながらも最後まで少女に付き合う姿を想像し

溜め息を付きつつ、国家騎士団副隊長のアレン・スウォードは侍女長と二人の後ろ姿を見守るのであった。

彼女とは（前書き）

会話はほぼありません！

彼女とは

ルディースル国

強大な軍事力・多彩なる文化・豊富な資源・巨大な国庫を兼ね備えるこの国はゼラウム大陸の約半分を有し

他国から恐れられ、崇められている大国である。

そのような大国の王宮に出入りできると言うのは例え洗濯娘としても名誉な事。

この王宮で働く為に必要なものは家柄などではない。全てはその者自身の能力次第。

その為、例え貴族の娘であろうとも能力が無ければ庶民の娘を王宮侍女として仕えさせる。

自分と言う人間に莫大な箔が付き、まして国家騎士団のエリートや

王族に見初められればそれこそこの国の要に近づいたと言うもの。

ある者は自らが王宮に近付くため、またある者は親族を近付けさせるため。

どんな手段を使うを事も厭わない。

そんな人間達の策略や欲望が汚く渦巻く場所……

…なあって事は我関せず。

今日も今日とてグエンダルに愛を叫ぶのは、王宮侍女見習いのキーナ・スーミヤである。

「グエンさん大好き!!」ってあれ、もう既に口癖じゃね?と周りが思うほどグエンダルに付きまとう彼女は、

肩辺りで揃えられた黒い髪、大きな黒い瞳、小さな鼻と象牙色の肌。

特別美人と言う容姿な訳ではないがコロコロ変わる表情や仕草は小動物のような可愛らしさを持っている。

そんな彼女がこの王宮にやって来たのは約1年前。

当時、ある他国で巨大な魔力が感知された為、国王陛下であるギルヘルム・リーグル・サン・ルディースルが自ら他国に視察へと行った際そこで保護したのが彼女だった。

なんでも、視察から帰る途中に盗賊に襲われている所をギルヘルムが助け、名前以外を覚えていないキーナを捨て置けず、共に連れてきたらしい。

巨大な魔力の原因は不明であったが、代わりに陛下と城に戻って来たキーナに臣下達は当然の如く困惑を示した。

何処の誰かも素性も知れぬ娘を城に置く事を「だってもう拾ってきたもんだ」で済ませる国王陛下（御歳56才）

当時は戸惑い怪しんでいた城の者も顔や身体中に大きな痣を付け、怯えているキーナに同情し侍女の作法と仕事を教えたのであった。

ずっと彼女を警戒していた国家騎士団も間者にしては間抜け過ぎる

キーナに警戒を解いた。

例え間者であったとしてもただ小娘一人。

物騒であるが、いつでも消せるであろう。

と、今では逆に癒し的存在にもなっている。（グエンダルとのやり取りや元気さが。）

彼らの中では彼女がグエンダルに惚れた事とグエンダルの絶対零度の（寧ろマイナス）視線を受けても失神する所か頬を染めるキーナの反応は国家騎士団七不思議となっている。

また、城の侍女達も貶されても貶されてもグエンダルに尻尾を振り続けるキーナにいじらしさを感じ、実は密かに、キーナを応援し隊が作られていることを本人は知らない。

ちなみに隊長は侍女長である。

拾い主である国王陛下には月に一度茶会へ呼ばれ、孫の如く可愛が

られているキーナ。付き合わされるグエンダル。

意図せず外堀から埋めていくと言う天然悪女である。

今や皆から好かれるキーナ。（キーナを利用しようとする者が次々消えているのを彼女は知らない）

彼女は今日も青空の下グエンダルに愛を叫ぶのであった。

「グエンさん大す…アベシッ!!!」

「寄るな。転けるな。息をするな。」

……顔面スライディングと愛しい人の毒舌と共に。

彼とは（前書き）

またまた説明文…です

彼とは

グエンダル・ハズウェル

ルデイスル国、否、例え他国の者であってさえも彼の名を知らない者などいないだろう。

白銀の髪、翡翠の様な色合いの切れ長な瞳、きめ細かな白い肌、通った鼻筋、薄い形の良い唇

美しくも妖艶な美貌
騎士としての鍛えられた体

老若男女を魅力してしまうような彼を言葉で表すとしたら：

冷酷無慈悲無情無表情石橋は自分で造れ

と、尽きることはない

ルディースル国が有する最強の軍勢、国家騎士団

人並み外れた魔力と、その強大な魔力故か卓越した身体能力を持ち、強靱な肉体である一握りの者しか入ることが許されない

グエンダルはそこに19歳と言う最年少で入団を果たした。

ルディースル国が大陸の殆どを勝ち得た大戦は彼が24歳の時に起き、その勝利は特にグエンダルの力で治めることが出来たと言っても過言ではない。

これにより24歳と言う異例の早さで国家騎士団の隊長に任命され26歳の現在で下手をすれば王族と並ぶ程の権力を得た。

敵に一片の情けも容赦もせず、例えその敵が昨日の仲間であっても顔色一つ変えないで斬り捨てる様は他国だけではなく自国の者たちにもトラウマを残した。（ちなみに「銀王」やら「氷の死神」などと呼ばれているのは本人の知らぬ事である）

この冷酷さは女性でも容赦は無く、寧ろ厳しさを増し

ある舞踏会でグエンダルに隣国の麗しき美姫が擦り寄り、その腕に自らの腕を絡めた瞬間……

「……グエンダルは躊躇う事なくその美姫に剣の切っ先を向けたのであった。」

それ以来その美姫はルディースル国を再び訪れる事はなかった。

グエンダルとしては本気で斬りつける気はなかったが美姫には立派なトラウマを植え付け、アレンには「国際問題だからな……!? 抜刀、駄目、絶対……!」などと小言を受けた。（アレンは本気で怒っていた）

常に無表情、てかこいつ感情あんの? と本気で思われているグエンダルの顔に最近変化が現れ始めたのは周知の事である。

1年程前に国王陛下に拾われてきた少女、キーナ。

威嚇されても脅されても貶されても無視されても不屈の精神と言うか異様な空気の読め無さでグエンダルに付きまとい

彼の人の顔面に表情と言うものを呼び起こした。

グエンダルからしてみればかなり理解不能な事。

何故ならこの王宮で一番キーナを警戒し目を付けていたのはグエンダルだったからだ。

自分の記憶が正しければ正体を突き止めようと脅しの為に切っ先を向けた事もあった気がするのだが…。

何をどうねじ曲げて折り曲げて間違えばこんなにも懐くのか。

今ですら自分は、キーナを信用している訳ではない。

だが国王陛下はそんな正体不明な少女をいたく気に入っているし国家騎士団の隊員達でさえ彼女を受け入れ始めている。

しかもキーナが自分に付きまといければ良く分からない視線まで寄越してくる。非常に面白い。

分からないが腹立たしい。

兎に角、グエンダルにとってキーナは理解できない腹立たしい“何かの感情を引き連れてくる小煩い子供なのである。”

…と本人は思っている。

+++++

「グエンさん今日は今日も素敵ですね大好き!!…ついでにアレンさんも今日は。」

「え、俺ついで?今はっきりついでって言っちゃったよね?」

「グエンさんー?挨拶されたら挨拶するのが常識ですよあいらぶゆう!」

「あ、無視？俺は無視？」

五月蠅いアレンもキーナも無視していたグエンダルだが：

「…ぐえんさん…。」
しょぼん。

挨拶を無視されたキーナの頭にはへにやりとした犬耳と萎れた尻尾が幻覚で見えた。

「…ご苦労。」

「！（返してくれた！！）」

「！！？（あのグエンが返事をした！？）」

「気持ち悪い顔を向けるな。ただの常識を返したまで。」

「…へへっ、それでも嬉しいです。有り難うございますグエンさんっ！」

ほんにやり笑顔を向けるキーナと一見冷めた目のグエンダル。

そして。

（嘘つけええ！！何が常識だ！隊員にすら目配せで終わる癖に…と
言うか…何だあの満足気な目はあ！！そんな目、大陸大戦で領土拡大
できた時しか見てねえぞ！……………うあああ痒い！無性に胸と喉
が痒い！！だいたいr）…強制終了。

グエンダル・ハズウェル

彼を言葉で表すとしたら

冷血冷淡完全無欠鉄仮面吐かぬなら吐かせてみせよう拷問で

そんなグエンダルとキーナは今日も今日とて良く分からない雰囲気
でアレンをむず痒くさせるのであった。

（あゝ。なんかしょっぱいものが食いてえ。）

彼女とお菓子と不機嫌な彼1（前書き）

ぶ、文章力が…orz

彼女とお菓子と不機嫌な彼1

「グエンさん好きッ!!!」

「きゃ!どうしたのよキーナ。私はハズウェル様ではないわよ。」

「うう…グエンさん不足なんだよう…ぬあーあの冷めた瞳で見つめられたいーそんでウハウハゲへほしいいー。」

「…まあ、視察に行っているんだもの。それにあと3日でしょ。」

「そうだけど。と言うかボケをスルーされると寂しいんですけど…。」

「ああ、キーナはいつも気持ち悪いから本気で言っているのかと思ったわ。」

「シェリーさん酷い!!!本気で言った事だけでも!」

王宮の数えきれない程の窓を侍女仲間と拭きつつ、キーナはグエンダル不足に悶えていた。

グエンダルとアレンが隣国であるアズウル国に視察に行ったのは5日前。

隣であるからそこまで長い間居ないと言う訳ではないが：

離れて1分でグエンダルに再び会いに行くキーナにとって8日とは地獄の様なものだった。

「しかもしかも！その国のお姫様って凄くお綺麗なんですよ？うう…お姫様が綺麗さを武器にグエンさんに迫ったりしたらどうしょ…。」

「別にあの方は顔の良し悪しで人は選ばないわよ。」

「くっ、美人には私の気持ちは分かりませんーだ！」

キーナが言う通りシェリーは美しい娘であった。

輝くブロンドの髪、海のような青い大きな瞳、白い頬はうすピンクに色づき長い睫毛はそこに影を落としている。

唇は瑞々しく潤っており、メイド服に包まれている豊満な胸は女のキーナでさえ目のやり処に困る程である。

「せめて私の胸がもう少し大きければなあ…。」

「あら、こんな物あっても何の役にも立たないわよ。キーナくらいスツキリしていると華奢に見えていいと思うけど。」

「ありがとうございます…あれ？」

「でも心配は無用よ。隣国の姫様はハズウェル様の名前を聞くだけで気絶してしまうらしいから。」

「…………なぜ。」

グエンダルの名前を聞くだけで気絶してしまう美姫…

未だにトラウマは健在だ。

「さ！そろそろ昼の時間ね。食堂に行きましょう。」

食事の後は階段掃除よ、

そう言う侍女先輩をどことなくグエンさんに似てるなあと思いつつ
シェリーの後を追う。

「はあ…グエンさんに会いたいな。」

キーナの眩きは空気へと消えていった。

十
十
十
十
十
十

「ご馳走沙汰です！ドーハさんのご飯は美味しすぎますっ。」

「ガハハ！いやぁキーナちゃんくれえ綺麗に食ってくれるところっちも作り甲斐があるわ！」

離れにある食堂は下働きや国家騎士団ではない衛兵などが食事を取る場所であり、料理長のドーハは食いつぶりの良いキーナをとてもし気に入っている。

なにせ衛兵のメニューをペロリと平らげてしまうのだから見ていて気持ちが良い。

「そうだキーナ、これあげるわ。」

「?…あ！マールだ!!!」

マールとは子供や女性に人気のカステラの様な焼き菓子で、この国のお土産に良く買われている。

「私の手作りよ。今城下の女性の中で手作りのマールをあげるのが流行っているの。」

「ありがとうございます〜！城下はあまり行かないから疎いんですよね。」

「ラッピングのリボンが黄色でしょ？黄色は“友達”ピンクは“恋人”赤は“片想いの人”青は“知り合い”。」

「…あ、黄色のリボン。」

ちら、とシェリーを見ると優しく微笑んでいた。

「階段掃除も頑張りましたよ。」

「へへ、…はいっ！」

嬉しい！シェリーさん可愛すぎる。お嫁に欲しいなあ…ああ、グエンさんに会いたい。…あ、

「シェリーさん、あの、マールの作り方…教えて下さい！」

「いいけど…ハズウェル様に渡すのね？」

「そうですけどニヤニヤしないで下さいよう。」

「ふふ、いいわよ。」

と言っても料理が壊滅的な腕前であり食べる専門のキーナ。

以前のお茶会で陛下とグエンダルに紅茶を入れ、それを飲んだ二人は口を押さえて青くなっていた。

ただお湯を入れるだけなんだけどなあ…何でだろ。

紅茶っすら物体Xにしてしまうキーナ。

グエンダルが帰って来るまで後3日。何とか物体Xでなく完成形マ
ーラとしてグエンダルにあげたい。

「ドーハさんに食堂を借りて、仕事終わったら早速今日から練習しまし
よう。」

「はいっ。」

グエンさん、上手くできたら食べてくれるかな？

会いたいな、グエンさん。

私、物体Xにしないよう頑張りますから！

グエンダルに渡した時の想像をしつつ、残りの仕事に取りかかるのであった。

ブルッ！

「…っ?!」

「どうしたグエン？」

「…いや、何か良くない気配が…。」

「風邪か？ま、あと3日だからな。」

「…（なぜか帰りたくないぞ。）」

彼女とお菓子と不機嫌な彼2（前書き）

グエンドルがでてきません汗；

彼女とお菓子と不機嫌な彼2

「な、何故だ…！」

グエンダル大好き人間ことキーナは絶賛打ちひしがれ中であつた。

焼いても焼いても…

出来上がるのは物体Xでなのだ。

キーナが作ったマーラの試食のせいで今や食堂に居るのは本人とシエリーだけである。

ちなみにドーハは物体Xにより医務室だ。

「もう無理ー！」

頭を押さえてブンブン振る。

「落ち着きなさい。ほら、唯一マーラの様な形のモノを包んであげ

たから。」

「う…ぐすつ、シェリーさんが味見して下さいよう。」

「…貴女私にこの生命を危険に晒す物体を食させる気？」
すう、とシェリーの目が細くなる。

「い、いえ！滅相もございません！！今日はありがとうございます
したッ！！！！」

やっぱりグエンさん少し似てるよ…。

「大丈夫よ。練習すればちゃんとソレっぽいものが出るわ。さ、
もう遅いし宿舎に戻りましょう。」

「はい。」

宿舎に戻る途中、王宮と宿舎の渡り廊下をキーナは歩いていた。
シェリーとは棟が異なるため一人である。

あーあ…。グエンさんにちゃんとあげられるかな。
ビックリするくらい美味しいマールを作れたら…。

『おお！なんて美味しいマールだ！！キーナ、貴様は家庭的な女性なんだな。毎日でもこのマールを食べたい。…私と結婚しよう。』

なあってグへへ。

グエンダルがその場に居たら虫を見るような目付きで気色が悪いと言うだろう。

唯一グエンダルがキーナを貴様呼ばわりしている所は現実味がある。

妄想でニヤニヤしながら歩く自称乙女。

「何か良いことでもありました？」

「わっしょいッ！！！」

急に声を掛けられて驚きに体がジャンプする。

「ぷ、あはは！ごめん、そんなに驚かせるとは思わなくて。」

振り返った所に居たのは近衛兵である。

近衛兵は国家騎士団の騎士とは異なり、前者は門番や城の外の見回り。後者は王族護衛や城の中の見回りを行っている。

どちらも軍服の様な物を着ているが、国家騎士団は黒に近い濃い青で、近衛兵は白である。

キーナの目の前に居る青年は白い軍服を着ている。

赤毛のツンツンした短い髪に、おなじ緑でもグエンダルよりも優しい萌木色の瞳

ふっくらとした唇に男らしい骨格

浅黒い肌が月に照らされた姿は美形慣れしたキーナには平凡に映った。（実はアレンもかなりのイケメンなのであった）

「あ、貴方は？」

まだ心臓がドクドク言っている。お菓子を落とさなくて良かった。

「俺は近衛兵のリムル・ダンシー。貴女はキーナ・スーミヤだろう。」

何で私の名前？

「貴女はこの王宮では有名だからね。それに黒髪黒目はここでは貴女だけだ。」

疑問が顔に出ていたのだろう。リムルは可笑しそうに笑っている。

「名前知ってるので、てっきり私のファンかと。」

「はは、ファンだよ。」

ニツコリ。

ぬ、わあああ！どちらかと言えば平凡なんて思ってたスミマセンン！！

何て言うか、い、色気がっ！
たれ目から色気が出てる！

「この時間は一人で出歩くには遅すぎます。棟まで送りますよ。」

「い、いえいえ、お気になさらず！ばびゅんと言ってしゃかつと部屋に入りますんでそれじゃあッ！」

なんか恥ずかしい！

本人は気づいていないが普段女性として扱ってもらえていないため、逆に女性扱いされると恥ずかしいのだ。

ビシッと敬礼し踵を返す。

「え、あ！ちよつとまっ」「ひでぶっ！！」……………」

コケた。

顔面から。

「ひ、ひたい…っ。」

タラリ。

「…ぷ、あははははッ！…！」

「へ？いや、え？笑うところでふか？」

「ごめ、…っさすが、あの死神を翻弄するだけある。」

死神？

「ああ、鼻血が出てるよ。このハンカチ使って。」

「いや大丈夫です！私なんかに勿体無い！！」

「はは、いいから。それとやっぱり送りますよ。」

転んだ所を見られて鼻血も垂れてハンカチ貸してもらって…

これ以上は今更ながら恥ずかしすぎる！

「いや、ほんとーにっ！大丈夫なんで。」

「なら、その持っているお菓子を僕に分けてくれないかな？」

「え、でもこれは私が作った物体Xで…。」

「手作りならなおの事。…お嬢さんを送り届けさせて下さい？」

それとも嫌かな…

眩き少し目を伏せる。

「う…お、くっ、無駄な色気マシーンめ。」

「ん？」

キーナの独り言に小首を傾げる。その仕草も可愛い。

「いーえ。ではお願いしてもいいですかね。」

「ふふ、喜んで。」

じゃあ行こう、と言われ歩き出したはいいが気になる事が1つ。

……なんだこの手はよおおお!! え、なんで繋いじゃってんの? ちょ。初対面。分かってんのこの人! ……………て、ああ。きっとまだ成人していない子供だと思われるんだな。うん。なら仕方ない。

この国では成人は15歳だが、キーナはその年をとくに過ぎているものの、童顔のせいかな11、12歳よく見られるのだ。

いつものパターンと納得し、放っておこうと決意。

これを誰かに見られれば面倒だが周りは誰一人も居ないから大丈夫だろう。

「キーナちゃんはそのグエンダル・ハズウェル隊長と仲がいいらしいよね。」

「へへ、相思相愛なんで。」
嘘である。

そしていかにグエンダルが素敵であるか繋がれていない方の手を振りながら興奮気味に説明をしやる。

「ってな感じでホントは優しいんですぅ〜！」

「はは。本当に好いてるんだね。……………でも気を付けた方がいい。」

「え?。」

「入口に着いたよ、お嬢さん。」

「あ、本当だ。あの、じゃあありがとうございました！」

「いえいえ、キーナちゃんと話が出来て楽しかったよ。」

「私ものです！これ、物体Xですがどうぞお受け取りくださいませ。」

「ふ、くだせえって。ありがとう。機会があればまたお菓子でも恵んでよ。甘党だからさ。」

「りょーかいです。」

…そうだ。シェリーはもちろん、厨房の人も侍女の皆も既に物体Xの餌食になったから明日からは試食してくれないだろう。ならば。

「あの！明日と明後日もマール作りの練習するんです！…良ければ試食して貰えませんか？」

「あ、これマールだったんだ…ごほっ。うん、僕で良かったら。」

「おい。そこまで言ったら何言おうとしたかバレバレだわ。どーせ料理下手ですよーッ！」

「ごめんごめん、でも本当楽しみにしてるよ。…じゃ、もう行ななくちゃ。」

「むー。絶対美味しく作れるようになりますから。」

「ふふ、頑張って。おやすみ。」

サラリ。

キーナの髪に指を通し耳を掠めて離れる。

「おお、…やすみなさい…。」

うわ、ちょっとドキッとしたぞ。

いやいや！ほおーりんらぶはグエンさんだけでも！やっぱり年頃な
んで私もね！

2日。あと2日我慢すればグエンダルに会える。

それを考えるとさっきのドキドキなど彼方に忘れてしまう。

「そう言えば、気を付けろとか言ってたっけ…？何なんだろう。」

リムルさん…不思議な人だな。

なんて考えていた為また顔面から転んだキーナを見ていたのは

空に浮かぶ月だけ。

彼女とお菓子と不機嫌な彼2（後書き）

話が進まないー

グエンダルがまだ帰って来ないー

わーん

彼女とお菓子と不機嫌な彼3 (前書き)

やっ
と…！

彼女とお菓子と不機嫌な彼3

今回の視察は8日間と言う短い期間だったが新たな問題が浮き彫りになった。

カルト国の国境侵害の危険。

ルディースル国と彼の国は黒の森と言われる鬱蒼とした森で隔てられており、それは先の大陸戦争が起こる前も起こった時でさえお互いが侵すことが無かった。

その理由はこの森事態が巨大な魔力を持つ、1つの存在だからだ。

長い歴史の中で繰り返される戦争で、幾度となく様々な国がこの森の魔力、資源を求めた。

しかし森はそこに意志があるかのように、魔力によって自身を傷つけようとする人間を惑わせて狂わせた。

国家騎士団の様に魔力が巨大な人間は少ないため、自分よりも大きな魔力に当てられたのだ。

その森があったからこそカルト国とルディースル国が大きな争いをすることなく平和協定が結べたのである。

故に黒の森はルディースル国とカルト国の平和協定の証。

それが今侵されそうになっている。

「陛下の言った通りだな。まさかあの森の資源を狙うとは。」

「魔力を持つ木材は希少価値が高い。：所詮奴等も人間。どんな目的であれ欲望は尽きないだろう。」

「まあな。グエンはこのまま騎宿舎に戻るのか？」

「：いや、中庭にでも行く。」

「中庭あ？なんでそんな：あ、まさか：。」

「気分転換だ。」

「気分転換、ね。じゃあ俺も行こーっと。」

アレンのニヤつきを無視し、グエンダルは中庭へ向かった。

+++++

「キーナちゃん元気かね？」

「…………。」

「会いたがってるだろうなあ？」

「…………。」

「待ってるかもよ？」

「…………。」

「キーナちゃ…ちよ、まてまて何だその握り拳は！やめ、やめてやめて！グリグリするなっ！禿げる！！」

「禿げろ。」

「イダダダダ！！ああ！噂をすればキーナちゃんだ！！」

神の助けとでも言うが如く目を輝かせて少し離れた所に見えたキー

ナを指差す。

拳が止まりグエンダルが振り返る。

どうせいつものようにスカートを持ち上げて自分の元へ走ってくるのだろう。

そして五月蠅く喚き立て…

「リムルさーん！！！！」

「キーナちゃん。」

「今日は渾身の出来です！」

「あ、マーラの形だ。成長したね。」

「へへ、頑張りました。食べて下さい。」

「ありがとうキーナちゃん。」

はにかむような笑顔のキーナと彼女の頭を撫でる青年。

「キーナちゃんと…あれは、近衛兵？　そう言えば城下では好きな相手に手作りのマールをやるのが流行っているって…あ、オイ！　グエン！！」

無言で騎宿舍へ踵を返し、グエンダルは中庭を後にした。

そのまま帰る気にもならず鍛錬をしてから騎宿舍へ向かった。

何故あの時自分は踵を返したのか。

それは。

いや、帰ってきたばかりであの子供の相手は疲れる。そう、自分は感じたのだろう。

鍛錬でうつすら汗をかいたグエンダルは騎宿舍の入口の前に小さな影があるのを見つけた。

既に日が傾き周囲は薄暗い。
そんな中1人で立っていたのはキーナだった。

「っあ！グエンさんッ！！！」

頬を真っ赤に染め本当に嬉しそうに走り寄ってくる。

「視察お疲れさまでした！！あの、あの、これ作っただんで良かったら食べて下さいっ！！！」

そういつて差し出された菓子。綺麗にラッピングされ、赤いリボンがついている。

手を伸ばしかけ脳裏に映ったのは、赤毛の青年。

「いらん。」

パシッ

「…え？」

グエンダルに払われたマールは少し離れた所に転がった。

「私に渡さずとも受け取って貰える相手が居るだろう。」

「い、居ないですよ！相変わらず厳し「素性の知れぬ者の手作りを食べる程警戒心が無いわけではない。」……っ。」

「…グエンさん？何か…怒ってますか？」

「これは貴様に対する普段の態度だ。俺は忙しい。帰れ。」

「あっ！グエンさん！」

何度か呼ばれたが、どんな顔
をしているか確認はせず騎宿舎へ入っていった。

「…………グエンさん…。」

残されたのはキーナだけ。

+++++

次の日、キーナの背中にはオドロオドロしい空気が流れていた。

「…………どうしたのキーナ？」

「…………いえ。」

「大丈夫？」

「……いえ。」

「…貴女、女性？」

「……いえ。」

「駄目だわこりゃ。」

ふう、と溜め息をつくシェリー。このままではいつ仕事を失敗するかわからない。

「キーナ、少し休んできなさい。仕事に支障が出るわ。」

「…すみません…、」

トボトボ歩いていくキーナ。

…もうッ！！ハズウェルめ。キーナに何をやったのよ。あんな耳と尻尾がしょんぼりしちゃって可愛…じゃなくて可哀想に！

シェリー・ロード

キーナの侍女先輩であり、友人でありキーナを応援し隊の副隊長である。

「はあ…。怒ってたよなあ…グエンさん。」

何故あんなにも怒って居たのだろう。いつもなら文句を吐きつつ貰ってくれると思っていたのに。

「頑張ったんだけどな…。」

自然と視線は下に向く。

「あれ？キーナちゃん？」

下に向けていた視線を上げた先に居たのは赤毛の青年だった。

「リムルさん…。」

「どうしたのキーナちゃん？顔色が悪いよ？」

「……。」

「…ここじゃ話ずらいだろうから、人が居ない方に行こう。」

リムルさんは優しい。

でも私の手を握って引いてくれているのがグエンさんなら。って思っっちゃうんだ。

末期だなあ…。

「何を弛んでいる！！お前らはそれでも国家騎士団の一員なのか！！」

鍛錬場、そこかしこに国家騎士団の隊員が伸びている。

「おいおい、何で今日はさらにキツくなってる訳？少し休ませてや

れ。」

「こんな程度で伸びるとは…騎士として恥ずべき事だ。」

「皆お前みたいな超人じみてないんだよ。」

本当にどうした？騎宿舎に帰ってきてからずっと機嫌悪いだろ。」

「…普段通りだ。」

嘘だ

本当は小さな影が残像として残っている為に苛々している。

その苛々が向いているのは彼女か。それより、彼女が傷つくであろう言葉を投げつけた自分なのか。

「そう言えば、好きな相手にマールをあげるのが流行っている。って言ったが、友人間とかでもあるらしいな。ラッピングのリボンで決まるんだと。」

確かーピンクは“恋人” 赤は“想い人” 黄は“友人” とかだっけかな。

昨日キーナちゃんが赤毛にあげてたのは黄色のリボンだったな。」

…………黄色？

あの時の、自分に捧げられたリボンは……

「…アレン。少し、抜ける。」

「あいよー。」

「つまりは、何故か彼は怒っていて、マールは貰ってもらえなかったと。」

「……はい。」

思い出すと落ち込む。

貰われなかった事ではなく、余所者扱いされた事に。

「……ねえ、そのマール僕に出来ないかな?」

「…え、でも…。」

「あの人は一度拒絶した物を再び受け入れる事はしないよ。キーナちゃんがせっかく努力して作ったんだ。…欲しいな。」
「……。」

確かにそうだ。

「今まで色々酷い言葉を言われてきたんだ。もう、いいんじゃないかな？」

それもその通り
貶されて
蔑まれて

でも
それでも

あのマールは。

「悪いが、その物体は私のだ。」

「「！」」

二人の前に現れたのはいつもより更に険しい顔をしたグエンダルだった。

「キーナ、仕事中だと言うのにフラフラするな。その様ならいつまでも侍女見習いのままだぞ。」

「しゅみませんッ！！！」

噛んだ。

「リムル・ダンシーだな。警備もせず此处で何をしている？」

「……………」

「この阿呆は連れて行く。持ち場に戻れ。…行くぞ。」

「わ！いた、いたたた耳が取れましゅ！グエンさんッ！！！」

「キーナちゃ、」

ボソッ

「――。」

「っ！」

キーナの耳を引っ張り、リムルの横を通りすぎる時耳元で何か囁く。

先ほどのグエンダルのように険しい顔をしたリムルは拳を握りながら二つの影を見送る事しか出来なかった。

+++++

今は昼食。

休憩時間のためか城内の廊下はしずかである。

「いたあゝッ。ちょ、コレ耳あります？私の耳まだ付いてます？」

「……………」

「…？グエンさん？」

「わ、…。」

「わ？」

「…………。」

何なんだ。
珍しすぎる程齒切れが悪い。

「貴様…。」

「はい。」

「貴様、は陛下に拾われた身。既にこの国の所有物であったことを失念していた。」

「…ん？えと、それは…。」

この間の余所者云々の話？
もしかして…コレ謝ってる？

あのグエンさんが…！！？

「それから、貴様の物体Xなど他に食わすな。処理位してやろう。死人が出られたら困るからな。」

この間の余所者云々の話？
もしかして…コレ謝ってる？

あのグエンさんが！！！！？

「それから、貴様の物体Xなど他の者に食わすな。城内で死人が出たら困るから処理位私がしてやろう。」

それって…それって！！！！

「あ、ああああの、今度の休みに新しいの作ります！…貰ってくださいか？」

「さっきからそうだと言っている。…それから、昨日の物も寄越せ。食す。」

「え。」

「話は以上だ。持ち場に戻りその無駄な体力で城に貢献しろ。」

ふい、

と鍛錬場への道に戻るグエンダル。

あのグエンさんが謝った…。

遠回しすぎるけど、マールも食べてくれる。って言った。

「…ふへ。グエンさん！後で持っていくますねっ！！大好き！」

一瞬止まったが、振り返らないグエンダル。
でもそれでいい。

あの言葉だけでいい。

一瞬貴方を留める事が出来たんだから。

「よし！仕事仕事ーッ！！」

今日はもう転ばない気がする。鼻歌を歌いながらまずはシェリーに謝ろうと思うキーナであった。

彼女とお菓子と不機嫌な彼3（後書き）

目まぐるしい。

最後は急ぎ足でした（汗）

アレンがマーラの真相を話したのはもちろんわざとです。

余計な事言っちゃった！

と反省した結果です。

彼女と昼寝と彼（前書き）

お気に入り登録ありがとうございます！鼻血が出ちゃいます。

彼女と昼寝と彼

ふあゝ、良い天気だあゝ。

暖かな日差しが差す中、キーナは数枚のカーテンを持ち中庭の木の下に居た。

城にあるカーテンはお針子によって解れを直すか新しい物に変えたりするが、侍女棟などのカーテンは下端の侍女が解れを直す事になっている。

キーナはぼっちり下端の為、今回はその仕事が回ってきたのだ。

折角天気も良いしあまり人が来ない中庭にやって来て、小さな手でチクチク縫う。

料理は壊滅的だが裁縫は比較的得意である謎のキーナであった。

そう言えば、グエンさん大丈夫かな。

グエンダルにマールを受け取って貰えた翌日、彼は医務室へと運ばれたらしい。（それを知っているのはアレンだけだが。）

保持している巨大な魔力の力で体内の猛毒さえも中和する力を持つグエンダルを負かすマール。

医務室に見舞いに行った時のグエンダルの絶対零度の視線は記憶に新しい。

しかも暫く近寄るな命令が出てる。

グエンダルが本気で殺る目だった為、破る勇気は無い。

嫌われない訳じゃないし…我慢しよう。

キーナは1つ欠伸をすると目を瞑った。

さわさわとした葉の擦れる音と暖かな日差しが眠気を誘う。

んゝ、眠い。昨日も徹夜で縫ってたし…少しだけ…。

+++++

「キーナ、またこんな所で寝て。
ん、…だれ？」

体を揺り動かされて目を覚ますと黒髪黒目の優しそうな女性が目の前に居た。

ここ、どこ？

小さな庭。素朴だが美しい花々が咲いている。

そこにある白い椅子に座っていた。

ああ、そうだ。ここは私の家だ。
この女性は、お母さん…

「母さん、キーナは…あ、お前こんな所に居たのかよ。父さんも待ってるぞ。」

そこにもう一人同じ様な黒髪黒目の青年がやって来た。

優しそうな目が女性と似ている。

「そうよ、今日は貴女が主役のお祝いなんだから早く支度しちやいなさい。」

彼は私のお兄ちゃん。

お祝い…そう、そうだ。

今日は私の19回目の誕生日。

「うん、ごめん。すぐ着替えてくるね。」

これが夢だと言うことには気付いたが、キーナの口からはその言葉がするりと出てきた。

自分の部屋。

あのヌイグミは親友に貰った。

カーテンはお母さんの趣味で、本当はピンクではなく水色が良かった。

壁の沢山の本はお兄ちゃんが自分の部屋に収まらない分

お気に入り姿見

クローゼット

花瓶

クローゼットを開け、薄緑のワンピースを着る。一階に下りると家族皆がいた。

「似合うじゃないか、キーナ。」

あの人はお父さん

「だって私が選んだものだもの。」

クスクス笑うお母さん

「腹減ったー。」 空気読めお兄ちゃん

レストランでご飯を食べ、お兄ちゃんに無理矢理お酒を飲まされて、仕返しにデザートを食べてやった。

お父さんも参戦してきて、お母さんに諫められて。

プレゼントを貰って、笑って、話をして、楽しくて。
このままここに居たい。

キーナはもはやこれを夢だと思わなくなっていた。

現実として受け止めたい。

このまま。

「すみませーん」

デザート最後の一口を食べられ、打ち拉がれている甘党な兄の為、新しい物を頼もうとキーナはウェイターを呼んだ。

「お待たせしました。」

「えっとこの、赤ワインのシャーベットと木苺の……。」
メニューから目を離しウェイターを見て、言葉を失った。

顔形は似ていないが、蠟燭の光を浴びて揺れる翡翠の瞳。

「……………あ……………」

愛しさが溢れた。

今までこの夢が現実であればいいと思っていたが、そんな事もうとうでもない。

「如何なされました？」

「あ、いえ。やっぱりいいです。すみません。」

去っていくウェイターの背中を見ながら、ふと先程まで五月蠅かった家族が静かになっていることに気付く。

振り返ると皆がキーナを見つめていた。
その瞳はとても静かで愛しいものを見る目だった。

きっと、私が何を言いたいか分かっているんだ。

「そろそろ時間ね。」

「え？」

「とても楽しかったよ、キーナ。」

「お父さん？」

「まあ、馬子にも衣装ってやつを見れたしな。ただデザートの恨みは忘れん！」

「ちっさ。こだわる所ちっさ。」

「キーナ。私達の大切な娘。寂しいけれど、きっとまたいつか会えるわ。」

そう言いながらキーナの頬を撫でる。

「大丈夫。どこに居ても貴女は貴女よ。」

「元氣だけが取り柄なんだからよー。」

「時間だ。」

「えっ。」

キーナ、

「」「また会う日まで。」「」

光に、包まれた。

十
十
十
十
十
十

さわさわと葉が擦れる音
暖かな日差し

静かにキーナは瞼を開けた。

城の中庭。

縫いかけのカーテン。

ふと隣を見る。

「うええ！！？グ、グエンさんッ！！！」

隣には本を広げるグエンダル。そしてその肩に凭れている自分。

「ふぉんぐー!」

素早く鼻を押さえる。

鼻血なんて出した日には死刑が待っている。

「グ、グエンひゃん、なんれここに…。」

もぐもぐと話す。

「…何の夢を見ていた。」

「…え?」

夢

懐かしい、彼方の人達。

「…覚えてないです。」

ヘラリと笑ったキーナにそこで初めて目を合わせるグエンダル。

いつもよりも何倍も近い位置に大好きな翡翠がある。

ほんの少しの間見つめ合う。

グエンダルの手がキーナに伸び

鼻を摘ままれた。

「涎の跡がついているぞ、間抜け面め。」

「ふにゃ!! やめへくさい!!」

「城の中とは言え何が起きるか分からん。この様に無防備に間抜け面を晒して寝るな。」

そう言うとは本を閉じ中に戻ろうとする。

「あ！グエンさん、あの、私、もうグエンさんに近づいていいんですか？」

「……………好きにしろ。」

チラリと振り返り、今度こそ去っていく。

「はい！！グエンさん、愛してるッ！！」

懐かしい人

きっともう会えない。

でも、私は彼を追いかけているから。

だから、寂しくなんてない。

冷たくて残酷で優しい彼を。

彼女と昼寝と彼（後書き）

んゝ難し。

彼と昔と彼女

鍛錬場に横たわる死屍累々。

その原因は言わずもがな銀王ことグエンダルであった。

「何度鍛練が足りないと言った。一度死ななければそれが分からないか？」

「殺しちゃマズいだろうよ。今年入隊したての奴等だ。少しは多めに見てやれ。」

意図せず殺気を放つグエンダルを諫めるのは彼の戦友、アレンである。

赤銅色の髪が緩くウェーブし、髪と同色の気だるげな垂れ目と目元のホクロが何とも言えない色気を出している。

グエンダルと同じ位の長身で体つきもしっかりしており、女性に人

気がありそうな容貌だ。

彼とグエンダルは12歳頃の寄宿学校から何となく行動を共にしている。

「新人隊員と言えども国に選ばれた騎士達。この程度ならば使い捨ての駒くらいにしかないだろう。」

そう言って隊員を無機物を見るような目で見つめるグエンダルにアレンは嘆息した。

「全く。最近いい兆しが表れてきたと思ったが根本的なものは早々変わらないか。……昔からそうだがよく考えろよ。人間、一度壊れれば元には戻れない。」

「壊れれば良いだろう。早々に役立たずが排除出来る。」

変わらず無表情なグエンダルを見て、これ以上言っても無駄だと悟ったアレンは、隊員に休憩を告げ歩けないものを医務室へと連れて行った。

鍛錬場に残ったグエンダルの意識は先程のアレンの言葉から昔の思い出と遠ざかる。

今も昔も自分は変わらない。

化け物と呼ばれた、昔と。

初めて人を殺したのは、まだ臍の緒が母親と繋がっていた時だった。

グエンダルの巨大な魔力は生まれる前から顕著であった。
母体に居るときから外界に溢れる程の魔力。

初めの頃は国家騎士団の一員であつた父親もそれに歓喜した。

母親も我が子に期待をかけ生まれてくる事を望んだ。

だが、彼の母親はグエンダルを生んだ引き換えに死んだのである。

母体が強すぎる魔力に耐えきる事が出来なかつたのだ。

母殺し

そう、周囲は陰でグエンダルを呼んだ。

父親は妻が死んだことに対し何も言わない。

しかし歩くのが覚束無い頃より手減無くグエンダルに稽古をつける姿は、愛する我が子への感情が見える事は無かった。

12歳で寄宿学校に入る頃には表情とは無縁の少年になり、そして既にその剣術や武術は父親をも越えた。

将来、国家騎士団の入団を約束されたようなグエンダル。

そんな彼に喧嘩を売る学校の輩は多く、そして彼らを半殺しにする。

その繰り返しによりアレンが現れるまで彼の周りは常に空間が空いた。

19歳で国家騎士団になったグエンダルの傍にはアレンの他にもう一人の青年が居た。

屈託無く笑う、笑顔が似合う青年。

恐れられていたグエンダルに臆する事なく話しかけ、気づくとよく三人で行動をしていた。

その青年を、殺した。

それが自分が手にかけた二人目だった。

他国の間者であった。

昨日まで同じ釜の飯を食べていた。
共に稽古をした。

小さな戦にも出て、背中を預けた。

屈託無く、笑う、青年だった。

周囲は恐れた。
軽蔑をした。

助けを乞う青年を、無表情で迷うこと無く殺したグエンダルを。

しかしグエンダルにとっては当たり前の事だった。

“ 敵 ”
であるのだから。

もし今アレンが敵だと知っても自分は迷うこと無く彼を斬り捨てるだろう。

祖国の為。と言えは聞こえは良い。

だが自分は本当に忠誠を誓っているのか？

偶々この国に生まれたから他国の敵を排除しているだけ。

ただただ淡々と。

それ以外は知らないかの如く。

否。

自分は本当にそれ以外の生き方をしらないのだ。

邪魔なら消せば良い。

羨望も、
軽蔑も、
恐れも、
欲望も、

…
「化け物」
…

消えろ

！…さん、

消えろ

！…ンさん、

消えろ

！…グエンさん大好きッ！…！

「…ッ！」

……すう、…はあ…。

随分と思考が飛んでいたらしい。

もう殆どの隊員が復活している。

「変わらない。今も、昔も。」

兆しなど無い、必要すら。

邪魔は、させない。

翳る翡翠。

「おい、グエーン。」

医務室へ行ったアレンが戻ってきた。

その隣には。

「まいすいーとらびゅーグエンすわあんツ!!」

……………何か居る。

「……………。」

グエンダルは自分の瞳孔が開いたのを感じ取り、

アレンは殺気を感じ取り、

「ああッ！不機嫌なグエンさんもス・テ・キ。」

その物体だけは空気が読めていなかった。

「貴様は、何しに、来た。」

一語一語切るグエンダル。

「や、落ち着けグエン！俺が連れてきたんだ！！」

グエンダルは身の内感情を持て余した。

何故こんなにも苛々する。

苛々している事に更に腹が立つ。

ああ、やはり煩わしい。

「私が、貴方に、会いたかったんです。」

交差する闇夜と翡翠

「貴方に、会いたかった。」

何故、そんなにも穏やかに。

「ふふ、呆れますよね。」

「……はあ。……ああ、呆れるな。」

フッ

とグエンダルの瞳なら翳りが無くなる。

「へへー、愛が溢れちゃうんです！」

「要らん。それしか言えぬかへドロめ。」

「生物ですら無い！！この間はまだゴミ虫だったのにーっ！」

「や、それでいいのキーナちゃん…？」

「失礼であろう。ゴミ虫に。」

「うおーい！容赦してあげて！！せめてミジンコとかで！」

「貴様ー！影薄なんちゃって副隊長め！！貴方には言われたくないですッ！！」

「誰が髪薄じゃー！！！！！！！！」

「ハーゲ！将来ハーゲ！！」

ぎゃあぎゃああと騒ぐ二人は再びグエンダルの殺気によって戻ってくるのである。

「貴様、邪魔だ。出ていけ。」

「キーナです。」

「出ていけ。」

「キーナです。」

「……………キーナ。」

「はい！！では失礼しました。」

ニコニコしながら戻るキーナの後ろ姿に溜め息を吐く。

全く煩わしい。

だがそう思うグエンダルの顔が先程とは異なり、幾分穏やかになっているのに気付くのは、

やはり気苦勞性の副隊長だけ。

彼と昔と彼女（後書き）

アレンはイケメンなんですな実は。

長編でなくなるべく中編で終わらせたい！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5258w/>

追う彼女、逃げる彼

2011年10月8日22時53分発行